・・・調子に乗って暴走したから見ないで！、の続き。

・・・暴走したのを恥ずいけど貼る

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
・・・調子に乗って暴走したから見ないで！、の続き。

【Ｎコード】
Ｎ０３５９Ｎ

【作者名】
・・・暴走したのを恥ずいけど貼る

【あらすじ】
ほのぼのとロリヤンデレっ娘と過ごします。
ラブコメ、基本一話完結。気が向けば少し伸ばします。
辛口批評随時お待ちしております　ｍ（＿＿）ｍ
基本放っておくと調子に乗るので時々叩いて下さい。
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ２１３５ｍ／　の続き。ですけど、キャラ以外はあんまり繋がってる点があ

りません。

※不定期更新、ヤンデレ。

第一話「軽い自己紹介」（前書き）

ちょっと指摘があったので、一からやり直し。↑そんなに進んでないから。
短くまとめてみました。

第一話「軽い自己紹介」

「ふあ～あ」
ああ、のどかな朝だ。ほんっとに平和だ。
「おはよ！」
「なっなっなんで！？」
ああそうか、昨日引き取ったっけ。
俺の名前は黒藤謙太（くろふじけんた）、１５歳。至って普通な中三。
こいつの名前は春風凛（はるかぜりん）、確か１２歳。詳しくは後述。
まず説明しなければならないのはこの状況であろう。
かいつまんで説明すると、
こいつの親がこいつを虐待していたので、
まあ色々こっそり親に無断でこいつを匿（かくま）っている状況なのだ。
……匿っているって言っても昨日は寝床と隠れ場所を提供しただけなんだが。
「もうここまで来たね★」
「ここまでって……」
「決まってるじゃん、そろそろ結婚かな？」
ええと、こいつはなぜ俺のことをとても愛してるらしい。その上、親の虐待で性格が少し……
「な～に考えてんのかな～？　もしかして夢でお姉ちゃんと……」
病んでます。
「違う違う！　そんなやらしい事……」
「やっぱやらしいことなんだ～★」
「……」
と、こいつは元彼女の妹なのだ。簡単に説明するとこうなのだ。
「そんなにお姉ちゃんが好きなの？じゃあ、もうこんな所居られない？じゃあ、もう死んじゃう？いや、別に君だけ殺しちゃうんじゃなくって、勿論、私も死ぬよ★。だって一瞬でも離れたくないのに

死に別れなんてどこのラブストーリー？古いよ、ふふっ。話がそれたから戻すね、だから、お姉ちゃんに紹介した後三人で幸せに暮らすんだよ★。え？やっぱ私じゃ物足りないと思って妥協したんだけど二人っきりがいい？勿論、お姉ちゃんだけとは許さないよ、他の誰だったとしても殺せばいいけどお姉ちゃんは殺したくないじゃん？あ、でも天国行かないと殺せないね。まあ、でも絶対離さないんだから★もう一生、いや永遠に君は私の物だよ★」

……もう説明めんどくさいから前の読んで！　ｂｙ作者

「あの……まだやりたいゲームもあるし、色々悔いがあるのでこの世に居るぞ」

「じゃあ離れないからねっ★」

……話が繋がって無いじゃないか。

第一話「軽い自己紹介」（後書き）

・・・少しやりすぎたかも。
後、短すぎたかな？

第二話「生活権確保」（前書き）

これは一応ギャグメインなので、きついヤンデレはちょい無理かも。

ちなみに、凛の語尾の☆は可愛い笑い★はヤンデレな笑いのつもりです。

第二話「生活権確保」

「謙太ーどうしたのー？」
お袋の声だ。
「あ！　おかーさんにあいさつしなきゃ。」
……
「そんなことして俺がどうなるか分かってんのか！？」
「え～と、挨拶→『あ、健ちゃんにも彼女が出来たのね～』→『せ、せきにんとってよね』→結婚→一生一緒」
「どんな思考回路してんの！？」
ってかなんでお袋の口調真似できんの！？
「どこがだめなの？」
と、何の悪気もない顔で言われた。
……こんなん相手になんて言えばいいんだろう？

1．いや、全部。
2．な～んにもダメじゃないよ
3．じゃあちゃんと一つ一つ数えていこうか

基本的に2は無しだな。うん。
3を選ぶと確実にお互いめんどくさい。
消去法で行くと……結局いつもの1か。
「いや、全部」
「え！？」
凛は可愛い目を白黒させていった。
「デキ婚はやっぱだめだった！？」
いや、そんなんじゃなくって。それもあるけど。
「まずどんな挨拶したら『あ、健ちゃんにも彼女が出来たのね～』って出てくるんだ！？」

凛は正座をして、床に手をつき、
「えと、ふつつか者ですが……」
「はい！　そこ、アウト！」
とつっこんでいたら、ドアの音が……
「けんちゃーん、だれかいるの？」
「「あ」」
ハモった。いや、今はそれどころではない。
「お母様、ちょっとこちらに」
と、久しぶりに凛が真面目な声で言った。
あれ？　凛の目の色、変わってた気が……

二時間後。
「お袋〜！」
なぜかお袋が精神衰弱して今、精神科にいる。
「どうしちゃったんだろうね★」
お前のせいだろうが。
想像通り、凛はお袋を洗脳しようとして、この有様。
やり方はご想像に任せよう。
「おい、謙太、一体……」
親父がそう言いかけて、固まった。
「お、お前……とうとう誘拐を……」
「してないしてない」
……完っ全にまずいことになったな。
「謙太君が誘拐する訳ないじゃない★」
「大丈夫かい？　お嬢ちゃん」
お嬢ちゃんって……、と思ってたら。
「記憶消去（めもりーぶれいく）！！！」
どこから取り出した、そのハンマー！？

「は、は、ハンマー！？」
「だってさー、包丁だとありきたりだし、鉈とか釘バットとか凶器は大体やり尽くされてるしー、いっそ血まみれの大きめのハンマーじゃない？今の時代」
凛は少し悪びれて言う、それに俺は言ってやった。
「職質されるぞ。」

追記：　親父はすぐ外科に送られ（そこが総合病院でよかった）お互い、少なくとも三ヶ月は入院生活。
つまり、二人っきりというわけになるのでした。

第二話「生活権確保」（後書き）

一応ラブコメのつもりでやってます！
なのでヤンデレでもマイルドです。

第三話「そういえば」（前書き）

更新遅れてすみません><
忙しかったもので・・・
新キャラでます！
ってか、前まで二人でやってたんだな。
こんなんでよく連載やろうとしたな。

第三話「そういえば」

……

……

……

この光景を見せられたら絶句せざるを得ないだろう。

いや、何でこんな言い回しをしてるのかって？

俺がエロ本で見た光景を見ているからだ。

つまり……

「なんで裸エプロンなのおまえ！？」

胸無いのにすんなよお前！

「何作る？」

な。めんどくさい言い回ししたいだろ？

はっきり言いたくないだろ？

でも、一応言おう。

「ええと、エビフライ」

「と、カレーライスと、ハンバーグと、スパゲッティと……」
「何で俺の好物全部知ってんの！？」
「へ？」
「『とうぜんでしょ？』みたいな顔すんな！」

そしてどうした！　その目！

「で、でも謙太君が一番おいしそう……★」
「ごめん、俺、つっこむのやめていい？」

凛はおもむろに包丁を構えだした。

「じゃあ食べちゃおっかな～★」

え？　食人？　食人なの？　そっちじゃないの？

「いやいやいやいやいやいやいやいやだめだめだめだめだめだめだめだめだめ」
「ビビリ過ぎだから」

とはいうものの、包丁をおろしていない。

「降ろせ、それ」
「基本、持っててもいいじゃん」

ってか想像してみろ、裸エプロンで包丁って……。

どんなシチュエーション！？

とはいえ、俺は料理が出来ない。つー訳で作ってもらおう。

すーすーすー

なかなか寝顔可愛いな。

いい匂いもしてきたし……

って俺！　何考えてんだ！？

股間が！　股間がぁ！！

バサッ！

「襲ってくれる気になったんだね★」

ちょっとはその気だったかも知れないけど！

「待ちなさい！」

あ、誰か来た。

「……？　黒藤君、何やってんの？」

構図だと俺が襲ってる形になっていた。

こいつは、佐川銘那（さがわめな）。

俺の隣の席で、生徒会長で、ツンデレとの噂も。

つまり、かなりのステータスな訳だ。

「あ、佐川さん」

「その体勢で言う！？」

確かに。

「……出来れば私も襲って！」

「こんの、ド変態どもが！！！」

第三話「そういえば」（後書き）

ああ、ＨＴＭＬつかいてえ・・・
だってさ、セリフに強弱つけれないじゃん！
ちょっと練ったつもりが、逆効果になったかも・・・・。
後、そっち方向に走るのは全体的なセオリーだと。
すみません、シモに頼りました。

第四話「結局」（前書き）

書けるときは書きダメしときます。

とはいえ、後一人ぐらい新キャラ欲しいな。

第四話「結局」

暴走する銘那を収め、何とか座らせる。
「さて、まず事態を振り返ろう」
「なぜですか？」
オマエがややっこしくしてるからだろ。銘那
「ええ、と。まず、こいつが寝たふりしてた」
「うん」
認めちゃうんだ。
「んで、まあ、俺が……」
「強〇しようとしてた」
〇姦じゃない！　未遂だっ。
「ちがうよ、ご〇かんじゃないもんっ！」
そうそう、よく言った、凛。
「二人の同意の上……」
ちーがーう！
「あ、あれは不可抗力だっ」
「ってこの本にも書いてあるし」

といって凛はエロ本を取り出した。
「……」
銘那は頬を赤く染めた。
「……。考えようか、凛ちゃん」「何を？」
「一応ね、この子、中学生だよ」
「私も最初そう思ったんだけどさ」

……

「銘那さんの顔見てよ」

？？？

いや、うつむいてるから分からないだけで、恥ずかしがってる……。

と、思いきや。
「うへへへへへへへへへ」
思いっきりだらしない顔でにやけていた。
「ぼっ暴走した！？」
「違うと思う、多分こっちが……。」
「素で～す」
「つまり……」
「多分」

「みんなが可愛いと思ってる委員長は、実は変態だったって事か」

「……！！」
やっと気付いたか。
「がっがっ学校ではぜったったたい言わないれ！」
「カミカミだぞ、一回落ち着け」

「学校では絶対言わないで！　いや、誰にも言わないで！」
「ああ、うん」
「絶対絶対？」
「絶対絶対」
ああ、うざったい女子の言い方。若干古い気もするが。
「絶対？」
「絶対絶対絶対絶対絶対絶対絶対絶対絶対絶対絶対ぜったいぜったいぜっらひ……ってやってられっか！」
「まあそうなるよね」
珍しく凛がツッコミにまわった。
「信用できない！　噛んだし」
「いや、普通噛むでしょ」
結局そこはおまけなんだろうが。
「でも、いつ言いふらすか分からない。だからずっと見張ってる事にするね」
ってことは……
「一緒に住むね」
「結局ラブコメ展開かよ……」
「謙太君は渡さないけどね」
凛、おまえはどのポジションなんだ。

第四話「結局」（後書き）

そろそろ真面目に売り方考えなきゃな。
読ませ方？書き方？
言い方はどうでも良いけど。
実際、考えないと、一人で突っ走ってるようにしか見えない。
独りよがりな小説は他人から見たら・・・。
一応、もう公開する所まで来たんだし。

と、呟く。

第五話「展開が（汗）」（前書き）

展開が・・・。
どうしよ。
ちなみに、これはまだ一日目です。
しかも昼寝って・・・。
そろそろ終わらせよ、一日目。

第五話「展開が（汗）」

あの変態女が住むと決まってから、
疲れたのでみんなで昼寝。になった。
「あ、あの～、場所おかしくない？」
ドアのある右側から、俺、凛、銘那となっている。
「普通私が真ん中で『この子を犯さないように見張ってる』なんて言うのがセオリーじゃん！」
「「ないない」」
「なんで？」
「絶対あんた、謙太君を寝取る気でしょ。」
「ギクッ」
初めてそんなことする奴見たわ。
「私の方が……。」
「あんたも言ってたじゃん！」
「うう……」
顔を赤くして下を向く。
「おいおい、そんなに年下をいじめるなよ。」
「……そうだね。ごめんね。」
「うん……」
「なぁーんてゆーと思ったのかぁー！」
といいながら、凛に飛びかかった。
「……！？」
「へっへっへ～私はバイセクシャルなんだ～」
バイセクシャルとは……、男女両方好きという、よく分からない言葉なのだ！（ｂｙ作者）
「ドＳかよオマエ……。」
「うん！」
ホント、ド変態だな。

「調子に乗るな。」
凛がいつの間にか、銘那の後ろにいて、包丁を構えていた。
「あっ危ないぞ！そんなの構えて！！」
「へ～え、やる気なの？」
パチン！
銘那は鞭で包丁を絡め取ったらしい。
あ～、ついていけね～。
どうやら、こいつらの変態さに比べれば、作者の気まぐれのバトル展開は貧弱すぎたようだ。
「ふぅん！」
どこからか取り出した二～五本目の包丁を銘那に投げつける。
俺は枕で俺を守る。
銘那は……。と枕から顔を少し出して確認する。

あれ？

銘那はなぜか、寝ていた。
そして凛も。
俺も自分の体勢が馬鹿らしくなって、寝た。

◇◇◇

しばらくして、目が覚めてきた。
あれ？何か二人が口げんかしてんのか？
面白いから聞いとこ。
「なっなんでそんなのの匂いをかぐんですか！？」
「そりゃあ、男の人の下着だもん。」
「それは理由になってな～い！」
少し薄目で見る。

なっ、なあ！

……。寝てるふりしてるからつっこめないけどさぁ！

よし、現状説明をしよう。

俺のパンツを持ってる銘那と、顔を真っ赤にしている凛。

「いかにエロ本を読んでいようと、三次元は無理だとかそーゆータイプ？」

「え？二次元はここと違うから、別に良いかな～とか思えるけど……」

「でも、『襲ってくれるんだね』って言ってなかったっけ？」

「あっ、あれでもう精一杯で……、謙太君が後はやってくれるかと……。」

「まあ、謙太はやりそーだけど。」

「じゃあ、何で止めたの？」

「いや、嫌そーだったじゃん？私、無理矢理犯されるとか好きじゃないし、君のことも好きだしね、凛ちゃん★」

「え……？」

あ、やっぱそうだったんだ。耐性無かったんだな、こいつ。

無理してくれて、可愛いじゃん。

「たったしかに謙太君が好きな人は殺したって良いけど、謙太君に襲われるのはあんまり……。」

とんでもないこと言い出したよこいつ。とはいえ、いつものことだから寝たふり寝たふり。

「ふぅん。じゃあ、頑張ってね☆」

……とんでもない会話聞いちゃったぞ。

もしかして今のがガールズトークって奴か！？

こんな変態でも、ガールズトークってするんだ。

と、思いながら俺は寝た。

あの二人なら相性も大丈夫だろ。

第五話「展開が（汗）」（後書き）

結局二人ともキャラ崩壊ｗ
しかも一日目終わってないｗ
笑うしかないｗ

頑張ります。

第六話「よし、テンプレをしよう。」（前書き）

皆さん気付いてるだろうけど、サブタイトルは作者のつぶやきです。

そろそろ長編ストーリーやろかな？

結構やれそうだし。このメンバーだと。

第六話「よし、テンプレをしよう。」

ふわ～ぁ。
気付いたら夜まで昼寝してたらしい。
最早、昼寝じゃない。
ごしごし、と目をこする。
すると、
「うわぁ！」
俺は叫んでしまった。
なぜかって……？
凛が包丁を構えていた。
しかも、俺のことを食おうとしてるときの目だ。
それに、あたりが血まみれだ。
あれ？銘那の姿が見えない。
もしかして……。
「ねえねえ、邪魔者はいなくなったよ。」
「お、おい凛、お前ら昨日は仲良く……」
「あんな女、邪魔なだけだよ。それよりも、謙太君、一緒になろ？」
「ちょ、ちょっと待ってくr……」

「私たちの愛に時間なんて関係ないんだよ？さっさと一緒になろ？」

そして凛は包丁を振りかぶり……。

ふわ～ぁ。夢か。

気付いたら夜まで昼寝してたらしい。

最早、昼寝じゃない。

ごしごし、と目をこする。

すると、

「うわぁ！」

俺は叫んでしまった。

なぜかって……？

「あ……あん」

「大丈夫よ、凛ちゃん」

「気持ち悪いよぅ、ぬるぬるとか……ベトベトして」

「大丈夫よ、すぐに気持ちよくなるから」

「何してんの！？お前ら！！！？」

「あ、謙太君。凛ちゃんがね」

「謙太くん！見ないで！」

「……」

ふわ～ぁ。夢でよかった。
気付いたら夜まで昼寝してたらしい。
最早、昼寝じゃない。
ごしごし、と目をこする。
すると、
「うわぁ！」
俺は叫んでしまった。
なぜかって……？
凛が包丁を構えていた。
しかも、俺のことを食おうとしてるときの目だ。
それに、あたりが血まみれだ。
あれ？銘那の姿が見えない。
「お、おい！凛！」
これならさっきの夢の方がマシだぞ！？
「ふわぁ～あ……。おはよう、謙太君。」
どうやら寝ぼけてたらしい。どんな寝相だ。
「謙太君！ごめん！トマトジュースぶちまけちゃった、はは。」
朝ご飯にトマトジュース使うか！？

とはいえ、平和でよかった。

第六話「よし、テンプレをしよう。」（後書き）

夢オチをやりたかっただけです。
それにしても謙太君が羨ましいですね。

正直僕の力不足で、謙太君がイマイチ・・・。
頑張ります。

第七話「（心の）おっでかっけおっでかっけ♪」（前書き）

宿題が山のようにあるので、現実逃避。
さあ、おっでかっけおっでかっけ♪

第七話「（心の）おっでかっけおっでかっけ♪」

「おい、凛。買い物行くぞ。」
「なんで？」
俺はトマトジュースを拭きながら言った。
「いや、トマト臭い部屋になんか居られないから、リセ●シュ買いに行こうと思って。」
「ふ～ん。おでかけか～。」
「朝ご飯は？」
出た、原因さん。
「え～と、見事に貴方が全てつぶされましたので買い出しに行くしか無いのです（怒）」
「はっはっは。気にしない気にしない。」
「勝手に人ん家で食材皆殺しして言えるセリフかそれ！？」
「おっでかっけおっでかっけ♪」
……
もういい。俺が悪かった。

財布を取り出し、血まみれに見えなくもないパジャマを脱ぎ捨て、
（なぜか脱げていたので）パンツをはき、ん？パンツ！？
「テメェ、人の着用中の下着取りやがったな！！！」
「ごめんなさ～い。」
こんな状況を見て凛は一言。
「あ～あ、だ～から言ったのに。」
完全に他人事です。

◇◇◇

一騒動あったものの、無事に家を出た俺たち。

面倒なので割愛するが、バスの席の取り合いなどで他愛もない口げんか以外はとても平和であった。

「ショッピングモール前ー。ショッピングモール前ー。」
バス運転手の気の抜けた声が響く。
「ほんっと、このバス会社、気の抜けた声がデフォなのね……。」
銘那ちゃん、そこはつっこんじゃダメでしょ。
俺は運転手に聞こえてないか冷や冷やしながら運賃を入れ、
お金をおろすため、ショッピングモールの銀行に入る。
「こうしてると家族に見えなくもないな。」
「そうかなー？謙太君がそんなこと言うなんて、（小声）やっぱ銘那は殺っとくべきだったか……」
何か小声で怖いこと言ってない？この子。

「お前ら、騒ぐな！両手を上げて座れ！」

突如、大声が響いた。
やばくね？あいつら、テレビで見た銀行強盗の格好みたいで……。
すっごく銀行強盗みたいだね。
みたいだね
「ねえ、私の持ってる包丁、銀行強盗に没収されないかな？」
人がせっかく現実逃避してるのにー！！！。
「凛ちゃん、包丁もって来てんの！？」
驚く所そこじゃないです！銘那さん。
ってか、銘那さんも凛さんも落ち着きすぎです。
「どうしたの？謙太君、顔色悪いよ？」
「い、いや、銀行強盗にあったら普通パニクるでしょ！？」
「そこ！黙らねえと打つぞ」
バンバン
天井に向かって威嚇射撃したようだ。

俺らは小声で話した。
「でもさ、普通パニクるでしょ？」
「あんなのお母さんに比べればマシじゃん！？」
……確かにそうでした。
「じゃあ銘那は？」
「ちょっとね★」
絶対何か裏があるな。

チュドーン

「……！？」
「爆発音！？」
「大丈夫！？謙太君。」
謎の爆発があり、銀行強盗がそちらを見た瞬間…

カッ

閃光玉みたいなのが光った。
「ねえ、謙太君、これって反撃のチャンスじゃないのかな？」
ああ、凛、オマエは包丁持ってたしな。
「そうよ謙太君。反撃開始よ」
って銘那、オマエもムチ装備中ですか……。
「俺の武器は！？」
「無いの！？いいよ★あげる。」
と、凛から手渡されたのは……。

なんで手裏剣！？

第七話「（心の）おっでかっけおっでかっけ♪」（後書き）

と、親にばれそうなので、続く！といっておきます。
ＨＴＭＬ使えてるかな・・・？

後記：使えませんでした★

第八話「自暴自棄になると暴走します。」（前書き）

現在、自暴自棄中。
そうなると暴走します。僕も凛も。

今回は三人称♪
理由は後で分かる。

第八話「自暴自棄になると暴走します。」

謙太は手に持っていた手裏剣をじっと眺め、覚悟を決めた。
「よし。」
凛と銘那はそれを見ると、
「「せーの」」
三人はお互いを見た。
「「「おりゃあ！！！！」」」
三人は一斉に犯人に向かって飛び出した。

犯人は何かが爆発したり、閃光玉を投げられたりでよく分からないまま、三人に飛びかかられた。
ザクゥッ
パチィンッ
シュッ
ザクゥッ
パチィンッ
あれ？
ザクゥッ
パチィンッ

パァン

何か異質な乾いた音が鳴り響いた。
強盗団の手から煙を吐く黒い物体が握られていた。
「「謙太君！！！」」
謙太は腹から血を流し倒れていた。

「うぉいっ、それ以上抵抗したらこいつも殺すぞ！」」

と、捕まってるのは無表情の少女。何も焦ってないが、手に持った閃光玉が震えて今にも落ちそうだ。

「ねえ、凛、あんたさぁ、謙太の様子見てきてやってよ。あの女の子は私が何とかするからさ。」

「守れなかった守れなかった守れなかった守れなかった守れなかった守れなかった守れなかった守れなかった、まただまただまただまただまただまただまただまただまただまただまただまただまただ、私は最低だ私は最低だ私は最低だ私は最低だ私は最低だ私は最低だ私は最低だ私は最低だ私は最低だ私は最低だ私は最低だ私は最低だ」

「……」

銘那ですら、凛をただ為す術無く見守るしかなかった。

「……………うふふふふふふ、あっはっはっはっはっはっはっはっはっはぁ！！！！！」

強盗団ですら、凛には何も手出しできない。それほど凛は発狂していた。

「みんな死んじゃえばいい、そうよ、みんな殺せばいいんだ。皆殺しよ、みーなーごーろーしっ！」

現場は、皆殺し♪皆殺し♪と、凛の声しかしなかった。

凛は、もう、理性の欠片すら残しては居なかった……。

「じゃあ、みなさん、さようなら★」

その言葉がきっかけで人々が動き出した。

皆の頭の中にあったのは、逃げなければ殺される。ということだけ。

人々はドアに集中する。

犯人の制止など、最早、意味を成さない。

殺す人間と脅す人間とで感じる恐怖には段違いの差があるのだ。

「みんな、にげてもむだだよ★」

サッ

ザクザクザクゥ！

ドアに包丁が突き刺さる。

人々に当たらなかったものの、もう出入り口は通れない。

状況は、ほぼさっきと同じであった。

違うのは、主犯と、主犯の目的、あと助かる望みの薄さ。

かろうじて動ける銘那が、凛を説得に向かう。

「凛！何でこんな事するんだ！？」

「え？けんたくんのいないせかいにいみなんてあるの？こんなせかい、じゃまなだけじゃない★」

状況は絶望的であった。

「凛！やめてくれ！こんな事しても謙太は悲しむだけじゃないか……。」

「わたしがよろこぶの★。私のよろこびはけんたくんのよろこび。ちがう？」

微塵も自分の言ったことに疑わない態度は、人々の戦意を叩きのめした。

◇◇◇

「……」

トントン

銘那は肩からの感触に、後ろに振り向いた。

「……」

一度、人質になっていた無表情の少女だ。

どうやら犯人も戦意喪失して、離してしまったのだろう。

何か、手榴弾のような物をこちらに差し出している。

「これを……、使えってこと？」

少女は少し顔を傾けてうなずいた。

◇◇◇

凛は包丁を、謙太を撃った犯人に振り下ろそうとした。

———その瞬間、ムチが包丁を絡め取っていた。

続く。

第八話「自暴自棄になると暴走します。」（後書き）

ちょっと、宿題進まなくて進まなさすぎて自暴自棄。
文体とか、展開とか無視した。

明日更新するつもり。
若干口調変わってる！？
ははは。

とうとう僕も病んできたか。
ｂｙ．友達

第九話「帰ろう」（前書き）

遅れてすみません。

元の場所へ帰ろう。

心のポジション。

凛も帰ろう。

帰りたいだろうし。

第九話「帰ろう」

俺は腹に強い痛みを覚えて目を覚ました。

「なんじゃこりゃ……」

そこにあったのは血溜まり。よく見ると俺の腹に繋がってる。

あ、俺、撃たれたんだな。

意外と痛くもない。もう手遅れなんだろうか。

それでも何も感じない。

後ろを向くと……

逃げまどう人々

包丁で封鎖された出入り口

なぜか犯人までもがビビってる

それに包丁を振りかざしてるのは……凛？

視界がかすんでいるのでよく分からないが、後ろにいるのが銘那かな？

何やってんだろ。

血が少なくなってふらふらしている俺の頭は今は何も考えれなかった。

逆に考えようとも思えなかった。

這いつくばっていって、今の状況を見ようとすることしか頭になかった。

ザッ、ザッ、ザッ、

「……！？」

「おい、凛。俺を、見て、化け物でも、見たような顔、するな。」
「謙太君！」
「ああ、そうだよ。」
「見ててね謙太君。今から皆殺しにするから。」

おいおい、何言ってんだ？こいつ。

「凛、なんでそんな事するんだ？」
「え？謙太君、撃たれたんだよ」
「そう言えばそうだったな」
「だから、皆殺し。」
「なんでだよ！脈絡無しかよ！！」
ガハッ

あ～、血、吐いちゃった。

それを見て凛はショックを受けたようだ。
「嫌、いや……いやぁ！！！」
「おいおい、そんな気持ちがらなくてもいいじゃね～か。」
「だって……血だよ？死んじゃうかも知れないんだよ！？」
「あ、そうか。もう死ぬかも知れないのか。」
「だから、謙太君の目の前で復讐を……。」

「そんな事するより、誰かに愛してもらえればそれでいいや。」

「な……なんでそこまで？」
「だってさ……寂しいじゃん。そんなことされても。」
「でっでもさ……」
「俺がして欲しいって言ったのに、してくれないのか？」
「う……うん。」

ぎゅっ

俺は凛を抱きしめた。

「お前さ、毎回、俺のために何かやってくれるけどさ、あれ、頑張ってるんだな。」

「うん……。だって……」

「まあたまには力抜いたら？　俺が好きなら、こーやって俺を頼ってくれてもいいんじゃない？」

「それもいいかも……でも、やっぱ今回だけ。」

「そうか」

「ところでさ、なんで愛して欲しいなんて言ったの？」

「それは、あれじゃん。麗が死んでさ、思ったんだよ。少しぐらい、こんな時間があっても良かったってな。」

「……そう。」

な～んか意識が、もう持たなそう。

「じゃ、俺は寝るわ」

そう言って、唇にキスしてやった。

「え？……えっえっえっえ？」

じゃあな、凛。

◇◇◇（以下、銘那視点）

……

いやいやいや。

あんなになってた凛ちゃんを元に戻せるなんて、普通考えつかないよ？

麗ちゃんにも好かれてたし。

なかなか分かんない奴ね～

と、思ったとき謙太が静かに目を閉じた。

その後、凛は決意をしたような表情で立ち上がった。

そしてまごまごしながらも

「あ、あの、みなさん、すみませんでしたっ！」

こうやってこの事件は幕を閉じた。

「じゃ、これはいらないよね。」

「……」

相変わらず無表情な少女に手榴弾（？）を返した。

使わなくて良かった。とでも彼女は思っているのだろうか。彼女はため息をついた。っぽい。

ドアは、みんなの力で開きました。

凛ちゃんは謙太君の隣で泣きじゃくってました。

強盗達は戦意喪失で警察に自首しました。

無表情な少女は、私の住所を聞いて帰りました。どうやら、後でお礼に来てくれるらしい。

あ、肝心なこと忘れてた。

謙太君なんだけど。

病院にて――――

「……非常に言いにくいのですが。」

「あ、ここからは私一人で充分です。この娘は関係ありません。」

「ううん、私も関係ある。覚悟は出来てる。」

「残念ですが……打ち抜かれていたのが、普通に手術して治るので彼の夏休みは潰れますね。」

……

……

……

「「紛らわしいわ！！！ボケ！！！！！」」

どっか～ん。

その医者は、謙太君と一緒に八月三十一日に退院になりました。

死ねば良かったのに。

と、言うわけでわたしの一番の夏休みのニュースは、銀行強盗に直接遭遇したことです。』

ふうぅ～。

おわった～。

明日から学校か。

じゃ、寝よっか。

お休み。謙太君。

「おい！そっち終わったんなら手伝ってくれよ！！」
「それよりも……愛してあげる。」
「ぐあああ！痛い！痛々しい！！！」
彼にとってはとてもいい思い出になったらしいです。

～夏休み強盗編～　了。

第九話「帰ろう」（後書き）

これで一安心。
ってか健太君は死ねません！
実は、第七、八話目は、テンションで突っ走ったので、どうしようか迷ってました。
後の展開考えながら書かないといけませんね。

第十話「『風紀委員二十四時！』の放映。」（前書き）

更新遅れてすみません＜　＞
取材してました・・・。

嘘です、ちょっとゲームやってました。

今回はショートショートでお送りします！

第十話「『風紀委員二十四時！』の放映。」

現在、俺らの前にはテレビが一台。

俺ら、広報委員の成果がここに詰まっているのだ！、といっても過言ではない。

なぜなら……、

いつも幅をきかせている風紀委員に堂々と仕返しできるのだ！！！

先生に優遇されてるし、ちょっとのことで凄い言ってくるし……。

いや、まあ俺らが悪いんだよ？　でもな、仕返ししたくなるだろう！！！

「おい！　各自ビデオを撮ってきただろうな！？」

「はい！」

「木下！　ちゃんと繋げたんだろうな！」

「は～い！」

「返事はしっかり！」

「はい！！！」

……もうツッコまないぞ。

「よ～し、試写会だ！」

「はい！　謙太委員長！」

そろそろ察してくれたかな？　読者の皆さん。

そうだ！俺はここでツッコミを……、

いや、風紀委員のアラ探しをするんだ！

ああ、なんとでも言えよ！　俺たちにはそれしかないんだよ！
つーか、中学校で風紀委員なんて普通無いだろ！
場合によっちゃ、生徒会より権力あるんだぜ！？
権力に対抗せよ！

すみません、日々の愚痴が……。

それでも察して下さい、俺たちがどれだけ風紀委員を嫌っているかを。

上映開始！！！

『風紀委員委員長、佐川銘那。
彼女の見回りは、今日も抜け目がない……』

◇◇◇

校舎裏でたむろしている男子生徒を発見！

委員長銘那の目が光る……。

「ちょっと、そこ！　何してるの！」
「え、えと……」
「何持って来てんの！？」

出てきたのはエロ本だった。
（よし！　銘那は絶対食いつくはずだ！　これで委員長を……）

「没収よ、こんな勉強に関係ないの。」
委員長は淫らな雑誌が出てきても表情一つ買えずに没収する。
（……ポーカーフェイスが得意な奴だな。）

◇◇◇

十歳ぐらいの女の子を発見！
（あ、あれは凛！？）
委員長銘那は少しも慌てず対応する……。
（よし、めちゃくちゃにしてやれ！）
「あ、どうしたのかな～、君？」
「こ、これ外で拾ったんです！」
差し出したのはまたもエロ本。
（……凛、気ィ効かしてくれるのは嬉しいが、さっきやった。それ。）
「なんで持ってきたのかな？」
「え？　これ、欲しくないの！？」
（よし、凛、多少のネタ被りはしたものの、風紀委員を……。）
「あ、それ、人違いじゃないのかな？」
「え！？　そうかも知れません……。すみませんでした……。」

（諦めるな！　凛！）

何か勘違いをされていたようだ。

何はともあれ、一件落着だ。

◇◇◇

授業中も、校内の風紀を心配する委員長銘那。

（これは授業受けてねーだけだろ……。まあいい、これも使おう。）

彼女は頭脳明晰である。それ故に、先生から当てられることも多い。

（褒めすぎ！）

「じゃあ、教科書の３９ページ、読んでくれる？」

「はい。」

（あれ……？　さっき凛がはじっこに映ってた気が……。）

「……！？」

一瞬、息をのむ銘那、何か落書きでもされていたのだろうか？

（画面のはじっこで、凛がこっそり笑っている。多分、エロ本を挟んだんだろうな。）

「ええ・・と、日本経済の発展は……」

問題は自分で解決する。それが風紀委員長としての威厳なのだろう。

（教科書暗記してんのか！？）

◇◇◇

銘那はトイレの中でも常に落ち着き払っている。
（次は何をしてくれるんだ？　凛。）

だから、用を足した後、紙が無くても落ち着いている。
（よし、これで馬鹿っぷりが……）

「……」
ティッシュを携帯しているのは常識である。
（そして流して詰まらせろ！）

ジャー
勿論、流せるタイプである。
（……ってか、女子トイレに忍び込んで盗撮って犯罪じゃね！？）

◇◇◇

その後も凛はことごとく失敗した。

ビデオが終わり、木下がすり寄ってきた。
「謙太委員長、これは使えますね★」
「……他人に頼りすぎだろ、これ。しかも委員長の良いとこ特集じゃねーか、しかも、途中から趣旨変わってるぞ」
「いや、でも……」

「自分らで仕掛けてでも使えるネタ獲ってこんかー！！！」

「ほほ～う。」

その声は……銘那！？
「いやぁ、凛ちゃんからタレコミがあってね……。」
「……！？」
「ごめ～ん、裸の生写真五枚で喋っちゃった★」
「おい！お前も盗撮してんじゃねーか！」
「『も』？　まさか……」

今日も広報部はにぎやかです。

第十話「『風紀委員二十四時！』の放映。」（後書き）

銘那と謙太は学校ではライバルです。
そして、銘那は学校の顔を素の顔をうまく使い分けています。

ネタ少なくてすみません＞＜
しかもあんまり笑えないかも・・・。

シリアスも学園ギャグもダメか・・・。

第十一話「そろそろ伏線を張ろう。」（前書き）

とか言いながら実はもう結構、張ってたりして。

・・・嘘です。意識してはやってません。

今回も張る気なんてさらさら・・・

あっあります！　宣言しましたもん！

べっべつに嘘つきたかったんじゃないんだからね☆←誰だ

今回は中身もこんなんです。

第十一話「そろそろ伏線を張ろう。」

現在五時限目。
昼休みに風紀委員にボコられてかーなーり授業が受けづらいのだが……
かーなーり！！！
風紀委員が生徒の学業を邪魔しちゃいかんだろ！
まあ、俺らが悪いんだろうけど……。

ガサッ

「……！？」

教室に妙な緊張が走る。
皆がその音の方向を探る。
……あれ？
俺の方じゃね！？
皆の視線が痛い。
足元を見ると……

やっぱりそこには凛が居た。

「黒藤君、足下に女の子が……」
「ああ、気にしないで」
逆効果だったかな？

「その娘、エロ本持ってるよ」

うわあああああん！！！

何でよりによってエロ本！？
ってかこの娘、結構純粋（ウブ）じゃなかったっけ？
始末しとけよ……。
「あ、ああこれは……」
「そこで拾ったんだよ」
そこは教卓の奥。
誰もが落としている可能性のある場所だ。
もう一度、妙な緊張が走った。
そして、銘那が雰囲気を察知してこう言った。
「誰がエロ本を落としたか、第一回エロ本ロワイアル開催だ！」
……風紀委員長がこんな事言って良いのか！？
現在自習中だから先生は居ない。司会は必然的（？）に銘那になる。
ただこいつも容疑者だ。
犯人はこの中にいる！

状況を整理しよう。まずは聞き込みだ。
「凛、エロ本はどこで拾った？」
「さっき。入ろうとしたら落ちてた。」
なるほど、銘那も可能性がある。あいつも持ってた。
現在可能性がある（と言うか登場している）のは銘那、木下。
他にもいるけど大体こいつら以外ありえねーだろ。

「おい、謙太！　お前のだろ！　片付けろ。」
「違うって！　木下！　お前も……」
「銘那も怪しいじゃねーか！　さっき没収してたし……。」
「私じゃない！　先生じゃないの？」

「あ。」

「教頭先生！　これ、担任の嶋本先生が教卓に入れてました」

先生、この場は先生に押しつけることにしました☆

その後、嶋本先生はもう学校に来ることはありませんでした☆

第十一話「そろそろ伏線を張ろう。」（後書き）

・・・。
・今度エロ本ロワイアル、長編でやりたいな～
・更新、遅くなってすみません。
・方針はこれで良いのかな？　出来れば感想欲しいです。
・前作よりＰＶ数が伸びないという事実。
・伸びろ

と、まだまだ言いたいことあるけど、ワールズエンド・ダンスホール入稿しないと・・・。
つー事で頑張ります！

第十二話「半分ホント、半分嘘」（前書き）

これは、半分は実際にあった出来事です。
ちなみに、もう半分は脳内補完された映像です。
ちょっとライスさんみたいになってるけど。

第十二話「半分ホント、半分嘘」

朝。

のどかな朝だ。

なぜなら……

あいつらが買い物行ったからだ！！！

詳しく説明すると……

今日、朝食の後、凛が「ゼリー食べたい！」

銘那が「あ、今日ジャンプ発売日だ」と言ったため、二人で行った。

平和だ。

テレビでも見よう。

あ、そうだ、借りてたゲーム、やり込み中だったな。

宿題もやらなきゃ。

……

……

寂しい。

平和とか暇とかそんなんじゃなくて、

とにかく寂しい。

そうだ。

スーパーへ行こう。

◇◇◇

と、言うヘタレな理由でスーパーに来たんだが……
何にも無いのな。

人はいるんだけど何にもない。

諦めて他の所行こうとしたその時……。

古雑誌回収コーナーに手を突っ込んでる中学生ぐらいの奴が居た。
性別は分からないが、俺と同じぐらいだ。
大体理由は分かる。

中学生のロマン、エロ本を取りにこいつはパンドラの箱に手をつっこんだのだ！！！

……普通に言うと、エロ本欲しい中学生って事。
ここは普通、中学生はほとんど居ない。
だが、一応校区内なので誰かに見られることは承知のはず。
よし。一つ、指導してやるか。と、思い……。
腰を押した。

「きゃっ」

……どこかで聞き覚えのある声。
「セ、セ、セクハラ～！！！」
……おい、風紀委員長がやっていいんですか？

と、思いつつも、
「おい、ここ、結構人多いんだ。見つかったらやばいぞ。」
「ああ、変装してるからだいじょーぶ」
普通の格好だしね！！　君！！！
「ってか凛は！？」
「え？　居ない！？」
迷子かよ。

◇◇◇

銘那と俺は手分けして探すことになった。
凛は携帯は持っているのだが、現在家で充電中。
と、言うわけで分からないのである。

俺は銀行に来てみた。
特に理由はない。一番近かったからである。
ウィィィン
自動ドアの機械音が無性に腹立つ。
中には凛は居なかった。

そこで俺は、ツインテールの女の子に目を奪われた。
なぜなら、ものすごく可愛かったからである。
女の子はツインテールを揺らしながら、こちらに微笑んでくれた。
「こんにちは」
「謙太君だ！」
何で俺の名前知ってるんだろう？
「そうだよ」
「よし、あの邪魔女も居ないし……」
はい、ターゲット確保しました。

髪型変えると人も変わるね。
「あれ～？謙太君、ちょっと頬赤いよ～」
「ちょ、そんなんじゃねえって。」
凛に似てるな、とは思ったけど、まさか凛だったとは。
携帯を取り出そうとしたら、
「謙太君ってツインテ萌えなのかな～？」
「ち、違うっての！！！」
「きゃは～☆　ツンデレだツンデレ～☆」
「だから違う！」

そんなこんなで俺の休日は半日終わった。

第十二話「半分ホント、半分嘘」（後書き）

ラブコメに方向転換完了！！！

Ｂ★ＲＳの執筆に取りかかるので、簡単にまとめます。

ホントの部分は、

中学生がエロ本取ろうとしてたのは事実です。

ネットで見れるのにね。

さらいたいぐらい可愛い女の子が居たのも事実です。

ホントにツインテで。

めっちゃかわいかった・・・。

第十三話「さて、これから・・・」（前書き）

どうゆう展開にするか思案中。
とにかく新キャラは出すつもり。
タイミング伺い中。

第十三話「さて、これから・・・」

「け、謙太君……」
あれ？　凛、こんな背高かったっけ？
「ん？　何だ？」
「あ、あのね……」
いつになくギャルゲ展開だ。
「うん。」
「え、えとね……」

「実は……」

そこで目が覚めた。
「あれ？」
目の前にいたのはちっこい凛。
それはそれで可愛い。
「け、謙太君……」
あれ？　まだ夢続いてる？
「ちょ、ちょっと早い……。こ、こ、心の準備が」
え？
よく見ると俺は凛を張っ倒した形になっていた。
そこへ銘那がやってきた。
「若いっていいね～」
「お前も俺と同い年だよね！？」

◇◇◇

ダンダン！
「お～い、銘那！　居るんなら開けてくれ！」

オッサンの声。
「あ、居ないって言っといて」
「何で？」
「後でいいから」
一応、追い返すか。
「オッサン、この家は俺ん家だ。これ以上うるさくすると警察呼ぶぞ。」
「俺がそれだ。」
そう言って警察手帳を出した。
どんな警察だ！
「礼状は？」
「今日は私用できている、そんな物はない。」
「じゃあ警察手帳出すなよ！！」
いかん！　警察にツッ込んでしまった。
「それで、銘那はここに居るんだな。」
最早、断定形。
「オッサン、銘那は居ないって言ってんだろ。」
「嘘をつくと……」
「公務じゃないんだから妨害しても問題ないよな？」
「あ、ああ……。」
歯切れが悪そうだ。
「謙太く～ん、どう？」
凛が様子を見に来た。
そして、出したままの警察手帳を見て、
「あ、これ、偽物」
と言った。
「お嬢ちゃん、これは本物だよ。見たこと無いんでしょ？　そんなの分かんないじゃん。」
「だって児童相談所の人と一緒に来てたもん。十回は見たよ。」
そう言うと相手は真っ青になり、

「あ、ちょっと幼児を、じゃなくて用事を……」
と言って逃げ出そうと……
逃げれなかった。
なぜなら、笑顔で銘那が彼の腕を掴んでいたからだ。
いくらふりほどいても離れないので彼が顔を見たとたん、
「……！？」
化け物を見たような顔をしていた。
「やだなあお父さん、我が娘の姿を見てその顔はないでしょ、その顔は。」
「「お父さん！？」」
「ああ」
と銘那の父はがっくりとうなだれた。
「何で力抜けてんの？　早く立ちなさいよ。」
「お前、どうやって食ってるんだ？　この人の家で居候してるのか？」
……？　ちょっと銘那に事情を説明してもらった方がいいようだ。
我が家の食卓は四人がけ。ぴったりみんなが座れる。
一番最初に銘那が口を開いた。
「謙太達は事情が分からないから、説明するね。いいでしょ？　お父さん。」
「ああ。」
銘那は口を開いた。
———あのね、私、ホームレスなのよ。
生まれたときからずっと。
気が付いたらお母さんが居なくなって、私とお父さんだけ。
多分、元は家があったんだろうけど、物心付いたときにはもう、

公園とかネカフェ暮らし。
学校行きながら夜バイトして、私も一人で暮らせるぐらいまでにはなった。
それで、仕事を私に任せちゃって、逆にお父さんが働かなくなって。
んで、捨ててきた。
でも、ちょっと家がないのが寂しかったから、クラスの人の家を回ってたら……

最後は俺が続けた
「俺の家でいい口実を見つけた、と。」
「まあ、そんな感じ？」
「うむ。」
銘那は鬱陶しそうに、
「そんな所でありもしない貫禄出しても無駄だって。」
「そうか？」
この人、俺より年下の思考回路してんじゃないのか！？
「んで、何しに来たの？」
「それはお金を……」
「「「自分で稼げや！！！」」」
三人同時ツッコミ。
「それだけ？　あんたプライドとかないの？」
「生きるのにプライドも糞もあるか。」
言葉はかっこいい。でも現実は働かないだけ。
「とーにーかーく！　私はお金は貸さないから。あんたと同じで、お金の貸し借りは苦手なの！」

銘那のお父さんは帰っていった。
「どう？　風紀委員長の意外な素顔。ネタにするの？」
自嘲しつつ言った。

「おいおい、家での情報は使わないって決めてんだ。俺は。」
「銘那、今度さ、どんなバイトやってたか、教えて☆」
銘那は泣き顔で、
「やっぱり、変わらずに接してくれるよね……。」
と言い終わる頃には、どこかへ隠れていた。
変える意味が分からないが、相当嬉しかったようだ。

後日、銘那と凛がバイトの内容を話していたら、凛が気絶していました。

第十三話「さて、これから・・・」（後書き）

銘那、過去編終了！
とっとかないよ～
結構無意識に伏線張ってたりしてw
ちまちま伏線拾いつつ、頑張っていこうと思います！

追記：「幼児を・・・」の所はラストに見直して気が付いた。幼児幼児ググりまくってたら、ミスった。

第十四話「体育祭。」（前書き）

バカテスで運動会ネタを見たのと、
リアで弟の運動会があったので、
何となく書きました。←結局ここ。

少し遅れてすみません。

第十四話「体育祭。」

今日は体育祭だ、

実は今年の体育祭は特殊でテレビ用と思われたぐらいバラエティ向けなのだ。

今年の生徒会が馬鹿だから。

生徒会が！

生　徒　会　が　！

俺らは悪くない。悪いのは馬鹿な生徒会とそれを見過ごす風紀委員だ～い♪

関係ないも～ん♪

ごめん、俺、生徒会と風紀委員両方に圧力掛けられてるからそんなこと書けないの。

実物がない限り。

つまり！

これで悪評を書いてやる！　っていう作戦なのさ……。

「よし、木下、準備は良いな」

「はい、オーケーです」

「おい……木下、そんなに弄るなよ……。」

「黒藤の……大きいな……。」

目が覚めると、凜が包丁を構えて横でこちらを見ていた。
「ねえねえ謙太君、木下って誰かな～？」
「そ、それは友達だ！　男子の！」
誰だ俺の枕元でＢＬのＣＤ流したやつは！
「謙太君、まさか……嘘だよね、嘘って言って！　嘘だよ嘘嘘信じない信じない信じない信じない信じない信じない信じない信じない信じない信じないこれは夢だこれは夢だこれは夢だこれは夢だこれは夢だこれは夢だこれは夢だこれは夢だこれは夢だこれは夢だ」
俺、悪くないよな。
「おい、凜、ラノベ並みの勘違い中悪いが、俺はちゃんと女子が好きだ。」
「だ、だよね。男子も守備範囲内で……」
凜、落ち着け。若干違うぞ。
「凜、もっかい寝るか？」
「うん……。そうして」
「何その忘れさせて顔は！？」
もういい！　犯人を突きつけて誤解を解く！
「銘那、ちょっと来い。」
「な～に～？」

ガシッ

「凜、こいつがＢＬＣＤ流したせいで俺はあんな夢を見させられた。」
「ふうん。」
凜はなぜか笑っている。
「銘那ちゃん、ちょっとあっちまで一緒にいこ。」

すれ違うとき、
「罪人には罰を、罪人には罰を……」
なんかの落ち着くための呪文だよね。そうに違いない。
銘那は体育祭に遅刻ギリギリの時間に来ました☆

第十四話「体育祭。」（後書き）

・・・体育祭に入りたかったけど時間がないので断念。
それはそうと・・・
実は、一万ＰＶ突破しましたー！

皆様のおかげです☆
これからもよろしくお願いします。

第十五話「体育祭が始まらない」（前書き）

時期を逃すのに始まらないとは致命的・・・。

ボケを重ねすぎてツッ込みづらくなる事態の回避方法を誰か教えて・・・。

第十五話「体育祭が始まらない」

俺は銘那が連れて行かれた少し後に家を出た。
寝坊していたらしいから。

ふと、マイクテストが聞こえた。
「え～予行演習、予行演習。　ドキッ、ポロリだ〇けの大運動会～！！！」
そのタイトルにピー音は必要ない！
ほら、ご近所の人みんな出てきてるし……

……なぜ今年の生徒会は馬鹿って？
とてつもない幼なじみが居るからだ。
「ちょっと、そこの人、会長呼んできてくれないか？」
「はい。」
説教の内容を考えてたら
「お～い、謙太～、何か用～？」
「語尾をのばすな。」

こいつが松永來未（まつながくみ）。
幼なじみ、生徒会の会長。超ド天然。
幼なじみとはいえ、今年に入ってからあんまり喋ってない。

「この学校……、毎年のごとくアホが会長が選ばれてるのはどういうシステムなんだ……。」
「この学校の呪いなんじゃない？」
まず素でこれ。マジで言ってるところに危機感を感じて欲しい。
「あのな……。」
「あ、七不思議だね。学校だったら。」

そして俺を無視。ひどい……。
「ところで、あのタイトル何とかなんないのか？　昭和の匂いが微かにするんだが。」
「え～、結構良い出来でしょ？」
パクリだし、中学生としては不健全だし。（ただし男子は得）
「とにかくそんなこと言わせないからな。」
「じゃあ……、バトルだね♪」
もう意味が分からん。

◇◇◇

銘那も登校してきた頃、準備はほとんど終わっていた。
「ごっめーん、ちょっと寝坊しちゃった。」
あいつの人望からか何も言われなかったのが腹立たしい。
「えー、生徒の皆さんはグラウンド、マスコミの方々は招待席へお向かい下さい」
……若干教頭の丁寧語がおかしいのはほっといて、
「よし、マスコミの精神を教わりに行くか。」
俺は招待席を目指していた。

招待席の近くには先生（じゃまもの）はいない。
だが、その油断が命取りだった……。
ガチャ、キー
放送のスイッチのはいる音。
「……ドキッ――――」
あいつは、あいつはこの事を言っていたのか……。
そう気付いた途端、俺は走り出していた。
放送席は幸い招待席の隣だ。
ダッシュすれば勝機はある。
「おりゃあああああああ！」

間に合え、俺の足！

「――――新曲だらけの春祭り♪」

……俺はあまりのアホらしさに転んでしまった。

「えへへ～、謙太君に勝った～」

こいつ……、本番でトチりやがった……。

「それは太鼓〇達人だ……。」（存在します　ｂｙ．作者）

普通あんなのミスるか？　いや、こいつは完全に普通じゃない……。悪い意味で。

「ふうぅ。」

落ち着いて辺りを見回すと、来賓の人が険しい顔でこちらを見ている……。

後日、俺は四時間説教の刑に処された。

第十五話「体育祭が始まらない」（後書き）

新キャラ登場！

あれ？　こいつじゃないんだけどな～。

まあいいや。

ちなみに、太鼓の〇人の四つ目があのタイトルだったと・・・。

次から競技に入ります。

第十六話「第一競技！」（前書き）

やっと第一競技です！

長かった・・・。

ちなみにこの話は脳内妄想で楽しむためのお話です。
ご自由に絵を妄想して下さい。

第十六話「第一競技！」

最初に一騒動会ったが、それ以外は何もなく普通に進行された。

……あれ？

背筋に寒気が……？

後ろを向いた。

――――木の陰から凛がこちらを見ていた……。

最近、凛がやりすぎな気がする。

◇◇◇

「第一競技！　ノーブラ＋Tシャツ＝とってもえっちい騎馬戦！」

前置きが長すぎると思うのは俺だけか。

と、いうか男子は見るだけになるんじゃ……？

「男子は黒藤とルックスが良いやつ以外参加禁止！」

一瞬にして俺の仲間が消えた。（なぜか二～三人の男子は俺に熱い視線を……。）

明日、学校休んで良いかな？　（ちなみに今日、日曜日）

――――凛のオーラが数倍になってる気が……。

◇◇◇

「えー、詳細ルールは今説明したとおりです。それでは、よーい……スタート！」

この学校の体育祭は全く打ち合わせ無しで行われるので、それも見物の一つなのだ。

なので実力の差がはっきり出る。

……他には時々暴徒が乱入してくる時もある。

そんなアホは一年に一人ぐらいしかいないのだが……。

もっと気違いなのはうちの生徒会だ。

教師陣も生徒会も乱入を阻止しようとしない。と、言うか大歓迎だ。

ノリが良いと言えば良いのだが、やる側としては大迷惑だ。

今年はとんでもないのが来た。

「他の女に……、謙太君は渡さないっ！！！」

とっても勇敢で、とってもかっこよくて、

……この学校（の男子）の生徒全員に俺が命を狙われる羽目になってしまった。

その辺にいた女子を騎馬にしている。

上手くチームワークを取っていて、小学生とは思えない統率力だ。

「凛！　後ろだ！」
「オーケー。」
ビュビュッ
「謙太君も、後ろね☆」
凛の手には帽子が二つ。
この女は何者だ？

◇◇◇

この競技は正確には帽子を取り合うのだが……。

女子と女子が体操服でノーブラでもつれ合ったり、絡み合って倒れたり、
時々、男子×女子になって恨まれたり、男子×男子で一定層から定評をいただいたりした。
これは売れるな。木下達にビデオ回させといて良かった。

「ピピー！　終了！」

残ったのは、高額収入源・男子の恨みの視線である。
「誰にも渡さない……謙太君は汚させない……。」
追加、呪詛を唱える凛。

……まだ汚れてるって思われてるのかな、俺。

第十六話「第一競技！」（後書き）

ちょっとラブコメ色強くなってきたな・・・。

それは良いんだけど、銘那がほとんど出てない。

由々しき事態だ。←誰だ。

時間がないのでここで切ります。丁度区切れてるし。

第十七話「第二競技！　またはリア充の基準について。」（前書き）

投稿遅れてすみません。
何かと忙しいもんで。

あ、あと、賞に応募しようと無謀にも企み中です。
・・・修行中の身ですので、ずばずば指摘して下さい。

第十七話「第二競技！　またはリア充の基準について。」

「第二競技！　乳揺れ＋ほとばしる汗＝とってもけしからん徒競走！」

もっと普通の放送できないのか、來未。

そばにいた凛が自分の胸をこっそり見る。そして目をそらす。

そこへ來未がやってきて、

「だいじょぶ、だいじょぶ！　需要はあるから！」

……どっかの漫画のキャラが言ってたな。

その後、凛は來未の胸を見て、

「呪ってやる、呪ってやる……」

凛、最近そういうのにはまってるのかな？

前回と同じく、参加選手には交代はなかった。

どうやら、あいつらは今日は観戦らしい。

一歩でもそこから出ようとすると……

「へ～、つまみ出されたいんだ～、こんなに男子得な体育祭ないのにな～。」

と、銘那が走り寄る。

さすが、問題０の風紀委員長だ。

にしても、銘那は競技をやりながら、一人で監視してるのか……。

毎回、銘那は偉大だと思う。

暗モードの凛はほっといて、俺は、参加選手だからこそ撮れるアングルで激写中だ。

つっても、意外とブレるが。

來未はちょっと遅めで撮りやすい。乳をたゆんたゆんさせながら走る姿は男子生徒からの定評がある。

その上、彼女は性格からもファンがいる。

銘那は早い。だが、一緒に生活しているせいか慣れてしまった。
陸上部(りくぶ)じゃねえくせに早ぇ……
あいつはあいつなりに人気がある。つーかこの学校で來未の次ぐらいに人気なのだ。
と、ここの二大女王の撮影をしていると、凛のオーラが怖い。てかそろそろ順番だから襲わないでね……。

俺がスタート位置に立ったとき、横にはなぜか知ってる女子が三人いた。
言うまでもないが、一応言っておこう。
凛、銘那、來未である！
「お前ら一回走ったんじゃなかったのか？」
來未は嬉しそうに
「この娘がね！　対決してくれるんだって♪」
テンションが高い。
「いいじゃん？　來未以外は同居メンバー対決って事で。」
銘那もノリノリだ。
肝心の凛は……
「ぶっ殺してやるぶっ殺してやる……」
もうそろそろ人格が変わりそうなので、
こっそり後ろから抱きついた。
「はにゃぁ！？　はうぅぅ……」
ものすごく可愛い悲鳴を上げて凛が元に戻った。
「あ、謙太君！　一緒に走れるんだ！　手加減無しの真剣勝負ね☆」
やっぱこいつはこうじゃなきゃな。
そして、審判が合図出す、
「位置について、よ～い」
――――乾いた破裂音。

結果、一位俺、二位銘那、三位凛、四位來未。
結論、俺は広報部だから足が速い

第十七話「第二競技！　またはリア充の基準について。」（後書き）

あ、謙太の写真は売ります。購買でｗ
一日の売り上げ↓￥７８０００　ここから想像して下さいｗ

今回はショートショート形式ですが、
あからさまな伏線はフェイクに使います！
ああ、寝起きだと文がまとまらない・・・。

第十八話「急ですが……、一旦切らせていただきます。そのためだけのかなり不

あーもう！
企画やってたら遅くなってしまいました……
しかも文体変わったし……

他にも事情はあるけど、一旦切ります
すみません＞＜

第十八話「急ですが……、一旦切らせていただきます。そのためだけのかなり不

色々競技があったが、たいしたことは起きなかったので割愛する。

さて、いよいよ最終競技だ。と思ったが、來未が悩んだ表情をしていた。

「どうしたんだ？　來未」

「いやぁ、もうエロネタ尽きたなって」

……競技ここで考えてたのかよ。

「最終競技！　水鉄砲＋体操服＝体操服が透ける射撃大会！」

どうしてこうなった！

「ええと、皆さん、今回は全員参加です！」

と、來未が言うと、観客席の男子から歓声が上がった。

「簡単に言うと、動けなくなれば負けです。

詳しく説明すると、今配っている、水鉄砲にしびれ薬入りの水を入れて、人に浴びせます！

終わるまで動けなくなるぐらいの強さです。皮膚にすこし触っただけでは効きません。安心して下さい」

質問が入る

「女子は下は下着ではないんですか？」

確かにそうだ。

「いいえ、全員ビキニです！　さぁ！　学校の水道をしびれ薬入りにしました。女子をぬらして水着姿を堪能するなり、男子をぬらして辱めるなり、普段のストレスを発散しちゃってくださ～い！」

……作戦が必要だな。と思ったら、

「行き渡りましたね？　開始です！！！」

男子の雄叫びが空に響いた。

大した作戦を立てる訳でもなく、とりあえず隠れる。
背中に人の感覚。やばい、水入れてない！？
「ひゃうっ」
押し殺した悲鳴。この声には聞き覚えがある。
「……凛か？」
「うん。」
俺は構えた銃を下げる。
「……どうする？」
何となく俺は聞いた。いや、俺も大して案はないが。
「……危ないっ！」
凛は急に飛び出した。
んで、持っていた水鉄砲を発射して相殺した！？
「フ、なかなかやるわね……」
打ったのは來未。
……ってか俺を狙っていたのか。
「私も負けないわよ！」
……なんか怪しい雰囲気。
あの……よく分からないがアレだ。
アニメの中途半端な終わり方……
「まだまだ続くぜ！」
言ってしまったか……。

運動会編、中途半端ですみませんけど終わりっ！

第十八話「急ですが……、一旦切らせていただきます。そのためだけのかなり不

読んでしまった皆様、誠に申し訳ありませんm（＿＿）m
制作やりかけで止まってまして、文体も結構変わったのでこんな終わり方に……。
フラグもかなり立てただけですしねw
さて、次回作をさっさと立てますが、またまた不定期更新なので長い目で見て下さいね！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0359n/

・・・調子に乗って暴走したから見ないで！、の続き。

2010年12月10日02時13分発行